

〔神都名勝誌一〕稻木略○中 産物紙煙草入此の地に之を

本舗を池部某と云ふ、稻木神社の東隣に住し、壺屋と號せり、祖先の代より、菅笠桐油合羽等を

製造するを業とし、終に桐油を以て、紙煙草入を作ることを發明したり、其の年代詳ならず、古

き狂詠に、夕立や伊勢の稻木の煙草入ふるなる光るつよいかみなり、などいへり、當時の製は、

頗質素なりき、略○中 凡南勢の地方にて紙煙草入を鬻ぐ家は、必壺屋の記號商標を掲ぐ、然せざ

る時は、往來の旅客、顧みる者なしと云ふ、


〔嬉遊笑覽器用二中〕榮花咄五し。ぼり。紙の煙草。いれ。百を。十八文のぬひ賃。心細き糸仕ごと云々、これは

ちりめん紙の類にて、油紙にはあらぬなるべし、質素なることなり、江戸にては、紙煙草入とだに


いへば、油紙のこと、なれり、其製は江戸にて、伊勢の壺屋紙にならひて、次第に上品出來たるは、


四五十年にも及ぶべし、

〔蜘蛛の糸卷〕鼻紙袋のはじめ

煙草入は、余の幼年中安永の比は、今の鰐袋  の形にて、皆こはせがけなり、表は似た山木綿、裏は

黒縹子、鼈甲のこはせがけなるを、上なきものとして、人も手に取て見る程なり、價は五匁位なり

しに、安永の末の比より、丸角はやり出だし、今も室町銀の櫻鉾に織部形の  かやうな

り、是今いふかな物の起立なり、又此同家にて織部形といふ煙草入をはじむ、 此形今にのこ

る、天明の比は、かの通人ども、銀の櫻鉾に、織部形煙草入を持たざるはなし、寛政に到りて、淺草田

原町に、越川屋といふ袋物見世はやり出だし、懷中ものに一層の奢侈を增長せり、

〔賤のをだ卷〕扇鼻紙袋たばこ入の類まで、色々に移りかはりたり、略○中 たばこ入、翁森山が竹馬

の頃、延享たばこ吞習ふ頃は、奇麗なる油紙のひとつへなるを楯形にして、廻りをかんせん縫に

して、紺青にて、女は役者の紋所などを隅に少さく書たるを用るもあり、男は無地、又は奇麗に